



Title	Interface humanities 01
Author(s)	
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12950
rights	(c) 大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイス の人文科学 / Interface Humanities
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

Group 1

シルクロードと世界史

陸と海から世界史的ダイナミズムを実証する

代表者・森安孝夫（文学研究科教授・東洋史）

近代の西欧国家、そして米ソ二極時代とその後のアメリカひとり勝ちの現状を見れば分かるように、生産力・購買力と並んで歴史を動かしてきた大きなモーメントは軍勢力である。これまでの歴史は軍事的勝利者を中心に作られてきたのであり、その結果、世界史は欧米中心主義に席卷された。ヨーロッパ覇権以後の世界の「近代化」とは「西洋化」にすぎず、今や「グローバル化」は「アメリカ化」のことである。こうした現実がある時は積極的に、ある時はいささかの反発や冷笑をあびながらも受け入れられてきたのは、背景に経済力という名の軍勢力があったからである。

ならば、近代以前において、地上最強の騎馬軍団を擁した遊牧騎馬民族が世界史の中に果たした役割が小さからうはずがない。今や日本の東洋史学は、近代の直前に圧倒的な軍勢力と経済力のもとに旧世界を「モンゴル＝システム化」した事実があったこと、さらにモンゴル以前の二千年間、遊牧騎馬民族が世界を動かす原動力であったことを明らかにする段階に至った。

従来の歴史学は、近現代の国民国家や民族などという「結果」を固定的に捉え、その栄光の起源を求めて溯っていくというものであった。それゆえ、ほとんどが勝利者側、支配する

側から見た歴史、具体的には欧米中心主義、あるいは中華主義の歴史であった。かつて華々しい活躍を見せた遊牧民族が今や野蛮人ないし非文化人の代名詞にさえなっているのは、ひとえに騎馬軍団が銃火器の前に屈服したからにすぎず、不公平このうえない。日本の世界史学に大きな可能性があるのは、第1に第二次大戦の敗戦によって帝国主義列強というのは、第2に近代以前の世界史をリードしてきたアジアからの視点に立てること、にもかかわらずアジアの雄であった中国の中華思想には束縛されていないこと、そして第3に東洋・西洋に偏らず原史料も研究論文も読む能力を備えたこと、第4に現地へのフィールド調査や原史料を所蔵する機関への出張を行なう経済力に恵まれていることである。

私たちは勝利者の立場からでも敗者の立場からでもなく、人類の歴史をその流れに沿って淡々と復元したい。民族や国家は、人類が農業を発明して以来、言語・宗教・文化が交錯する「インターフェイス（境界・接点）」な場（歴史空間）において生成・発展・消滅を繰り返すなか、時代と地域に応じてさまざまに形成されてきたのであり、今後も変化し続ける流動的な歴史的所産にすぎないと捉えるのである。

法学部出身者を中心とする日本の超エリート官僚たちが、わが国の東洋史学の到達点を少しでも認識していたならば、アメリカのアフガニスタン・イラク攻撃にたいする日本の態度も大きく変わったはずである。21世紀は人文学の学問的出番なのである。

このような視点に立つてこの研究グループが具体的にめざすのは次の2点である。

1. 陸と海のシルクロード関係史料の収集・公開・分析と、多言語史料・映像資料を統合した新しい「世界史」研究法の構築。
2. 上記の研究を中核とした最新の歴史学による、高校世界史教育を刷新する方法の開発・実践。

コア・メンバー

荒川正晴	文学研究科教授	東洋史学
榎本文雄	文学研究科教授	インド哲学
川北稔	文学研究科教授	西洋史学
桃木至朗	文学研究科教授	東洋史学
山内晋次	COE 特任教員	日本史学

研究グループ プロフィール

かぎりなく多様で豊饒な、現象の大海へ

人文学のインターフェイスをもとめて、

6つのモデル研究が始動する

シルクロードと世界史

トランスナショナリティ研究

イメージとしての日本文化

言語の接触と混交

映像人文学

臨床と対話

Group 2

トランスナショナリティ研究

人類学の視座からグローバリゼーションのなかの現代を問う

代表者・小泉潤二（人間科学研究科教授・人類学）

場あるいはロカリティと強く結びついてきた。私たちは個別空間に足場を置きながらも、より広い空間と時間に視点を拡大し、現代世界の理解に適した新しい学問領域を展開することを目指している。

「トランスナショナリティ研究」では、国内外の講師を招聘して行われる上記の連続セミナーのほか、2003 年 9 月にはラテンアメリカ・カリブ海研究国際連盟第 11 回大会（FIEALC 2003 OSAKA <http://www.pac.ne.jp/fiealc2003/>）の一環として国際シンポジウムの開催を予定している。個別研究としては、中米から米国への移民、北東アフリカの紛争と難民、インドネシアの地方政治と経済援助、オセアニアの移民と経済変容、国際労働移動の研究のほか、大学院生による現地調査が、アジア・中南米・ヨーロッパ・オセアニア・アフリカなど世界各地で行われる。

コア・メンバー		
春日直樹	人間科学研究科教授	人類学
木前利秋	人間科学研究科教授	現代社会学
栗本英世	人間科学研究科助教授	人類学
中川敏	人間科学研究科教授	人類学
三島憲一	人間科学研究科教授	現代思想

人・モノ・情報の流れが特定の場や集団や国家を越えて、新たな関係性をつくりつつあるのは優れて現代的な現象である。私たちの研究グループは、こうしたトランスナショナルな事象にたいして、人類学を主体に現代思想と現代社会学の協力を得てアプローチする。トランスナショナリティ研究連続セミナーをプロジェクトの中軸とし、これに国際シンポジウムや事業推進担当者・研究員・大学院生による研究を結びつけ、また国内外でのフィールドワークやデータベース構築作業などを効果的に連関させようとする。

「トランスナショナリティ」概念を核とする研究テーマとして、次の 3 つの問題領域について事例を収集し分析しつつ総合化を図る。

1. グローバル化にともなうトランスナショナルな流れの様態の分析。人・モノ・情報の流れの形成や拡大、滞留や不均等性。
2. グローバル化の進展とコスモポリタニズムの発現にともなう反動あるいは平行現象としての、ナショナルまたエスノ・ナショナルな次元で閉じようとするモメントの分析。新たなナショナリズムの勃興、所属の政治学、移民排斥やゼノフォビアの進行、先住性概念の強化、民族紛争の深刻化など。
3. 特定の場と結びつかない「脱領域化」（デテリリアライズ）されたアイデンティティの分析。ディアスポラや難民、NGO やビジネスにおけるトランスナショナルなネットワーク形成など社会学的側面や、多様なトランスカルチュラリティの成立と変動などの文化的現象。

これらの問題を扱うこの研究グループにおいて中心になるのは、インターフェイスから成り立つ境界的、媒介的、相互作用的な学問としての人類学である。人類学は人文・社会科学諸分野の学際位置し、異なる文化を持つ異なる地域や社会を研究対象とし、現地との相互作用のなかで情報と資料の収集をする。しかしこの学問は、ひとつの閉じられた空間・



難民はトランスナショナルな移動の一形態である。ケニア北部のカクマキャンプには、スーダン・ソマリア・エチオピア・ウガンダ・コンゴ民主共和国・ブルンジなど数カ国からの難民約 8 万人が暮らしている。写真は南部スーダンのバリ人たち。難民キャンプでも共同体のシンボルであるドラムのまわりで歌い踊る。ドラムの胴は、ドラム缶やバケツを利用した代用品。エスニックな共同体を再構築する試みの一端がうかがえる。（撮影：栗本英世）

Group 3

イメージとしての日本文化

インターカルチュラルなプロセスのなかで自文化を定位する

代表者・伊藤公雄（人間科学研究科教授・社会学）

うした「他の文化」からの視点が、「自文化」のイメージ形成に反映されていくプロセスにも十分な配慮をしていく必要がある。

特に注意しておきたいのは、ここでいう「文化」は、芸術や思想さらには宗教のようないわば「大文字」の文化（ハイカルチャー）に限定されないということである。ポピュラーカルチャーを含む「小文字」の文化に関しても、国際的な研究拠点を目指してデータの蓄積・分析とともに研究体制の組織化を進めていく予定である。

「大文字」の日本文化をめぐるインターフェイスについては、すでに昨年、国際シンポジウム「国際化のなかの日本学」が開催されており、この春には、「日本文学 翻訳の可能性」と題した大規模な国際シンポジウムが準備されている。

他方、「小文字」の文化をめぐる研究も開始されている。アニメやゲーム、ドラマやマンガなど日本発のポピュラーカル

チャーは、アジア圏のみならず、欧米などにおいても広く受け入れられている。これらのポピュラーカルチャーを通じた「日本」イメージ形成について、歴史的な文脈や政治・経済的な動向にも目配りしつつ、ダイナミックなプロセスのなかで考察を深めていきたい。

コア・メンバー			
荒木浩	文学研究科助教授	日本文学	
伊井春樹	文学研究科教授	日本文学	
出原隆敏	文学研究科教授	日本文学	
海野圭介	文学研究科助手	日本文学	
荻野美穂	文学研究科助教授	日本学	
川村邦光	文学研究科教授	日本学	
金水敏	文学研究科教授	国語学	
杉原達	文学研究科教授	日本学	
富山一郎	文学研究科助教授	日本学	
中村生雄	文学研究科教授	日本学	
真鍋昌賢	文学研究科助手	日本学	
山中浩司	人間科学研究科助教授	社会学	



Group 5

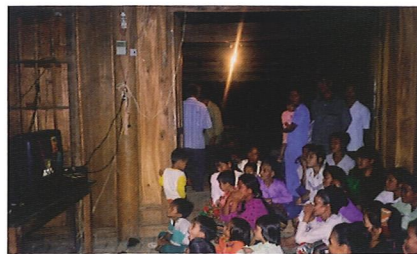
映像人文学

メディアの境界を越える表現文化の様相をとらえる

代表者・山口修（文学研究科教授・音楽学）

従来の人文学はおもに文字言語情報を扱ってきました。それは、文字言語情報がより信頼性が高いとみなされると同時に、扱いやすい情報だったからです。これにたいし、音声言語は文字言語に変換されてはじめて同等に扱われるようになり、画像や映像は保存再生の技術が向上するまでは、情報とさえみなされなかったといっても過言ではありません。その種の技術がほぼ確立し、さらに急速に進歩しつつある今日、人文学は文字言語情報だけの学問にとどまるべきではありません。文字言語情報は、現在私たちが扱うことのできる情報のごく一部に過ぎないのです。狭義の文字言語と狭義の映像とは相補的な関係にあります。諸領域の研究者が相互に協力して各種情報の特性を比較検討し、文字言語や音声言語をも含む広い意味での映像情報の記録、保存、活用の方法を研究し、人文学の現代的状況への適応を進め、「インターフェイスの人文学」の一翼を担うことが私たちのグループのおもな目的です。

初年度には、RVMV（ベトナム少数民族無形文化財調査・



記録された映像に見るベトナムの子どもたち（2001年11月）



『国際デザイン史—日本の意匠と東西交流』2001年刊 思文閣出版
第1回と第2回の国際フォーラムの成果で、第3回目が3月に開催される

映像記録化および人材養成プロジェクト)、ウィーンに残されている楽譜とバレエ・パントマイムの台本をもとに音楽学と演劇学との連携を進めるラスカ・プロジェクト、アジアを中心に「画像と文字」の関係史と現状について比較研究するデザイン史フォーラムのプロジェクトがスタートしました。関連する催しとして、この2月にRVMVシンポジウム「表演芸術における映像記録化」、3月に国際デザイン史フォーラム「画像と文字」が開かれ、それぞれ着実な成果を挙げています。

第2年度からは、COE関連授業として「芸術とメディア」「メディア論」「映像人文学演習」などがはじまり、教育においても「映像人文学」の理念が実践に移されます。これらのプロジェクトのメンバーはメディア・ラボでの活動に積極的に参加し、各種データベース構築、関連授業の教材や教授法の開発などを通じて、「インターフェイスの人文学」に貢献したいと考えています。（執筆：藤田治彦）

コア・メンバー

上倉庸敬	文学研究科教授	美学
永田靖	文学研究科助教授	演劇学
根岸一美	文学研究科教授	音楽学
藤田治彦	文学研究科教授	美学
桃木至朗	文学研究科教授	東洋史
山口修	文学研究科教授	音楽学
山中浩司	人間科学研究科助教授	社会学

Group 4

言語の接触と混交

日本語の変容プロセスを社会空間のなかで検証する

代表者・真田信治（文学研究科教授・日本語学）

「日本語ブーム」といわれるが、マスコミで語られる「美しい日本語」「正しい日本語」といった概念は、どこか硬直したステレオタイプの価値観を身にまとっている。生きた言語は、単一的視点から決めつけられる価値や美醜とはかかわりなく、人々の間で接触と混交を繰り返し、ダイナミックに変転し続けている。私たちの研究課題は、このような人間相互のコミュニケーション、あるいは言語の機能を特に重視した、応用社会言語学の立場からの基礎データを収集しようとするものである。

「単一言語・単一民族」といわれ、言語問題は異国のことと思われてきた日本でも、歴史上「日本語」が政治的に生み出されたことを論ずる研究が近年増えつつある。また、いわゆるグローバル化によってさまざまな言語が行き交うようになっている。そのようななかで、母語によって自らを表現する権利と、地域社会にアクセスする権利という両面から、異言語間の相互理解の問題を取り上げていく（ちなみに、社会言語学的には「方言」と「言語」との境界はない）。

基本的な言語権を考えるために、また偏狭なナショナリズムや少数派の切り捨てに対峙するために、現代日本の多言語状況の見取り図を描く。さらには海外における旧植民地、ならびに移住者コミュニティなどでの現在の日本語継承と運用の実態を把握する。

具体的な活動内容（サブテーマ）は8つほどに分けられるが、そのひとつに世界の各地で行われる日本語・日本文化教育の実態を把握し、地域社会での「共生」にどのように寄与しているかということについての調査・研究がある。また、ブラジル日系社会でいまでも話されている日本語と現地語の混交言

語の調査・記録や、琉球列島における、伝統的琉球語と全国共通語との混交から生まれた「ウチナーヤマトグチ」の研究なども進められつつある。ほかに、「在日コリアンの言語相」「明治時代横浜ビジンの研究」「環太平洋地域における日本語の位相と運用に関する調査研究」「混交言語としての各地ネオ方言の実態記述」「言語学研究動向の調査研究」といったテーマが設定されている。

以上のように、私たちの研究グループでは言語接触の観点から、世界規模における記述調査を行うことで、この分野の研究における日本での拠点形成をはかりたい。

コア・メンバー

大庭幸男	文学研究科教授	英語学
金水敏	文学研究科教授	国語学
工藤真由美	文学研究科教授	日本語学
津田葵	言語文化研究科教授	社会言語学
土岐哲	文学研究科教授	日本語学
山下仁	言語文化部助教授	社会言語学
横田睦子	COE 特任教員	言語文化学



残存日本語調査
ミクロネシア連邦チューク州 ウーマン島にて

Event Information

- 4月
- セミナー 「ブラジルポルトガル語の現状と日系社会」 セミナー
 - 研究会 海域アジア史研究会
「記憶と対話」研究会
遺族支援システム研究会
臨床コミュニケーション研究会
臨床的災害救援システム研究会
「臨床と社会」研究会
メディア論研究会
国際デザイン史フォーラム「画像と文字」研究会

- 5月
- セミナー 「日系社会の言語的アイデンティティをめぐって」 セミナー
 - ワークショップ 「グローバル化と人文科学の変貌」 ワークショップ
 - 講演会 映像人文学講演会
懷徳堂春季講座「中欧三都市物語」
 - 研究会 海域アジア史研究会
臨床コミュニケーション研究会
インターカルチャー研究会

- 6月
- セミナー 「ブラジルにおける日本語教育事情」 セミナー
 - ワークショップ トランスナショナルリテラシー研究ワークショップ
 - 研究会 海域アジア史研究会
「死の臨床における比較文化」研究会
臨床コミュニケーション研究会
「臨床と社会」研究会

- 7月
- ワークショップ 「グローバル化と人文科学の変貌」 ワークショップ
 - 研究会 海域アジア史研究会
中央アジア学フォーラム
「死の臨床における比較文化」研究会
臨床コミュニケーション研究会
メディア論研究会
国際デザイン史フォーラム「画像と文字」研究会
 - 演奏会 ヨーゼフ・ラスカ《父の愛》演奏会

くわしい内容や日時は、順次ホームページにアップしていきますのでご覧ください。
http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/

Group 6

臨床と対話

コミュニケーションをたぐりよせる知と技の探求

代表者・中岡成文（文学研究科教授・臨床哲学）

“臨床”のイメージ？ 白衣に身を包んだ医者？ それともカウンセラー？ 残念ながら「臨床」は、病や苦しみの種類に応じて専門分化し、〈専門家－受益者〉関係のもとで専門的な処置のなされるところになってしまった。つまり現代社会において「臨床」は専門家がいわゆる「素人」に関わる、あるいは逆に専門家に期待される典型的なイメージと化している。

専門的な知識で武装した専門家や研究者と「無知」な素人、このイメージにおいて欠落しているのは、相互浸透する知のあり方である。“病床に臨む”と書くその字が示すのは“人々の苦しみに出会う場所”。そうした場所はなにも病院に限らない。家庭でのケア、末期患者のためのホスピス、災害ボランティアなど数多存在し、〈臨床の知〉はそうした場所で現に働いている。つまり〈臨床の知〉とは、ある専門家によって占有され応用される知識ではなく、さまざまな背景を背負った他人にまみえるその場ではじめて生成するコミュニケーションなのだ。

しかし他方で、ボランティアやフィールドワークの経験が教えてくれるように、コミュニケーションはまったくの偶然に生ずるのではない。それはローカルな知や文化的な背景や社会構造に多く依存している。〈臨床〉という関係として生成するコミュニケーションは、ゼロからスタートするのではなく、すでにローカルに動き出しているコミュニケーションに別のそれを接続させることから始まる。そうした複数のコミュニケーションからひとつに紡ぎだされる創発的コミュニケーションこそが〈対話〉と呼ばれるはずだ。

現在、私たちは〈臨床コミュニケーション〉という風変わりな名の下に、こうした臨床とコミュニケーションを結び合わせる〈対話インターフェイス〉の構想に取り組んでいる。それは、数多ある「臨床・学」にならぶ新しい研究分野ではなく、いわ

ゆる専門家と一般市民、マジョリティとマイノリティ、ジェンダー間、世代間など、異なるコミュニケーション文化圏に属する人々のあいだで実効的に働く〈公共的対話〉の知を目指すものだ。こうした試みは新しいものではない。科学技術に関する「コンセンサス会議」、日常経験をもとに哲学の問いについて議論する「哲学カフェ」や「ソクラテック・ダイアログ」、利害の対立する人々のあいだで関係を回復させる「^{ミディエーション}調停」、あるいは戦争被害者や被災者の語りの聴きとりなど、すでにさまざまな人たちによって模索されている。重要なのは、実行不可能で空疎な対話の理念ではなく、異なる立場にいる人々に〈対話〉を演じさせ、公共的意思決定へと歩み寄らせる対話の^{メチエ}技だ。腕に覚えのある参加者を歓迎する。

コア・メンバー

渥美公秀	人間科学研究科助教授	ボランティア人間科学
入江幸男	文学研究科助教授	哲学哲学史
紀平知樹	文学研究科助手	臨床哲学
関嘉寛	人間科学研究科助手	社会学
恒藤暁	人間科学研究科助教授	臨床老年学
平井啓	人間科学研究科助手	臨床老年学
本間直樹	文学研究科講師	臨床哲学
鷺田清一	文学研究科教授	臨床哲学



哲学カフェ・オープニング対話（應典院コモンズフェスタにて）

Part 1

海外衛星映像配信システム

前迫孝憲

情報通信技術（ICT）の進展は、時には社会変化の源泉ともなる。1980年代末、衛星から降り注ぐ「国境を越えるテレビ」映像により、期せずして、東欧に雪崩のような民主化の動きが起こったことは記憶に新しい。アジアが「国境を越えるテレビ」の時代を迎えたのは、1991年の香港 StarTV の配信開始からだと言われている。トルコから日本、モンゴルからパプア・ニューギニアまでアジア全域 38 か国、潜在視聴者 27 億人を擁する 5 チャンネルの衛星テレビ局の開局時には、日本語のパンフレットも作られていた。そして、「アジア文化圏を創る」目的で香港に移住したビデオジョッキー Nonie さんをはじめ、数々の有名人が生まれることになる。しかし、日本にはほとんど視聴者がいなかったものと思われ、紆余曲折を経て 1993 年の「緊急」経済対策規制緩和項目に「国境を越えるテレビ」の認知が盛り

込まれたものの、StarTV など「放送」承認書が交付されたのは 1995 年になってからだった。一方、1990 年に弱冠 23 才の華僑実業家の慧眼により 12500 万ドル程で立ち上げられた StarTV は、1993 年には既に約 9 億ドルで売却され、その利益は東京駅八重洲南口付近の約 900 億円の JR 跡地取得に充てられ、巨大ビルを含む再開発が行われたと言われている。海に囲まれた日本も、その足元は、ICT 分野をはじめとするアジアの急激な変化に直結している。

現在では、赤道上空 36000km の静止衛星軌道上から、各国の公共放送局などを含む数多くの機関がテレビ映像を配信している。衛星テレビが「国境を越えた」多数の視聴者に、同時に高品質の情報を伝達する方法として適していることには、議論の余地はない。そのなかには、ドイツ DW、イタリア RAI、スペイン TVE、フランス TV5、

ポルトガル RTP など欧州各国や、米国政府機関の WorldNet、中国中央テレビの国際チャンネル CCTV4、タイ Thai TV Global Network、中東カタール Al-Jazeera など、各国で多数の視聴者を抱える有名なチャンネルも数多く見られる。

日本でも、1998 年 10 月から NHK が NHK WorldTV の名称で世界配信をおこなっているほか、国際教育チャンネル NIME World などがこの国際配信網を利用している。大阪大学大学院人間科学研究科では、早くから遠隔講義や世界配信に取り組んでおり、1998 年 9 月に東館新築記念シンポジウムを、太平洋、大西洋、インド洋の 3 基の通信衛星とインターネットを通して世界配信した。これはタイの衛星チャンネルで再中継され、また南米アルゼンチンのコルドバ大学からは質問を受けた。昨年 12 月から今年 1 月にかけては、アフガニスタンから大阪大学に向けた双方向遠隔講義を 7 回実施し、今回の COE プログラムの協力を得て、NIME World の衛星テレビとインターネットによる国際配信をおこなった。この講義はさらに、中国・清華大学遠隔教育

学院の運用するアジアサット衛星の遠隔教育用チャンネルにより、実験的に再中継され、広東省などの教室に流された。実際の講義をリアルタイムに中継するかたちでおこなわれた今回の国際配信では、光ファイバ通信（Japan Gigabit Network により大阪―東京間を伝送）と国際衛星網の相互接続などの新しい試みを、大阪大学サイバーメディアセンターや通信放送機構（TAO）、NHK 情報ネットワーク、KDDI などさまざまな機関や関係者、学生の協力を得て実現した。その結果、今後は日本全国から国際衛星網へのライブ配信も可能となっている。

タイの衛星は、朝鮮民主主義人民共和国の中央テレビ Korean Central TV をはじめ、カンボジア、ミャンマー、ベトナム、ネパール、インド、パキスタン、モルディブなど多くの国々の公共放送局の中継をおこなうなど、アジアの地域映像情報の流通に特別の役割を果たしている。また 2005 年からは、iPSTAR と呼ばれる、アジア全域を網羅するインターネット衛星の運用も計画されている。そのほかに、現在でも軌道上に約 2～3 度間隔で隙間なく並

んでいる通信衛星では、各国の地方放送局や教育テレビ局などのさまざまな映像が中継されており、研究や教育に役立てることができると考えられるが、微弱な信号を捉えることは、これまでなかなか困難だった。そこで今年度は、インクラインド衛星（軌道上を微妙に揺れ動いている衛星で、中小機関の利用が多い）にも対応可能な受信装置を設置するとともに、学内のパソコン等で視聴できるように環境整備を進めている。

教育分野に限っても、ICT の普及は、「変化への対応力を有する、時と距離を越えて学習する新しい知識社会」の形成を促すと期待されている。今後はトランスナショナルなものを目指す、しかも地域の特色などを重視する情報流通網が、重要な役割を果たすのはまちがいない。その意味で、現在整備を進めている海外衛星映像配信システムが秘めている可能性は、きわめて大きいといえよう。

（まえさこ・たかのり／人間科学研究科教授／コミュニケーションメディア・教育工学）



1: 清華大学からはアジアサット衛星で広東省に中継配信 2: 在アフガニスタン日本国大使館公使館原氏をゲストに迎えた第6回講義 3: 大阪大学講義室から質問をしている様子 4: 教員養成大学長 Faqool 氏をゲストに迎えた第1回講義（左下がアフガニスタンの映像） 背景: 衛星用パラボラアンテナの様子

Part 2

人文学における
デジタル・メディアの本格的利用にむけて

—メディア教育、データベースからメディアテークへ—

園府 寺 司

Interface Humanities は、デジタル・メディアとの本格的取り組みを始めます。ご説明にあたり、私の個人的な体験から述べることをお許しいただきたいと思います。

リソースの共有と公開

1981年にオランダに留学した私が何より驚いたのは、研究や文化活動に必要な基礎情報の徹底した共有・公開ぶりでした。大学図書館は完全一般公開ですし、ハーグの国立図書館は、書名等を書いて送るだけで、全国の図書館からその本を検索して郵送で送ってくれます。また、国立美術館版画室に行くと、受付に住所氏名を書くだけで、誰でも巨匠のオリジナルの版画を閲覧できます。紹介状も身分証明も必要ありません。ハーグのRKD（国立美術史研究所）には膨大な数の美術作品の複製写真や資料が保存、整理されていて、これも完全一般公開されています。

RKDの母体はある個人の研究用写真コレクションで、その後、多くの専門スタッフを抱える機関に発展してきました。スタッフは完

全に専門職ですから、絵を持って鑑定依頼に来る人もよく見かけます。ここでやっていることはきわめてシンプルです。作品写真、資料をひたすら集め、整理して完全公開する。それは、学問・文化的リソースを共有・公開するという思想の徹底した実践でした。そして、このシンプルな仕事の積み重ねが、研究や教育、社会全般にもたらしてきた恩恵は計り知れません。

ただ、これを日本でこれから始めるかと思うと、見込みは絶望的でした。そもそも日本には研究や文化のリソースを共有するという思想が欠如しています。大学の図書や資料だけを見ても、教官室、研究室にばらばらに入っていて、一般公開はおろか、学生にも、同僚にさえ敷居が高い。まるで個人の書斎の寄せ集めで、共有や公開など雲の上の話に思えました。

デジタル化の意味

しかし、デジタル技術の発達で光が見えてきました。デジタル情報なら、カラー写真などと違い永久保存でき、場所もとらず、何よ

りも共有・公開がはるかに容易です。Web上で世界に公開も可能です。文学研究科ではすでに懷徳堂文庫所蔵資料のデータベース化が進められていますが、それ以外にも芸術系や歴史系の画像データベースなど、多くの必要があります。これまでに阪大関係者が撮影、所蔵してきたスライド資料などもいずれ劣化するので、早急にデジタル化して保存、整理、公開していかなければなりません。

データベースは、自分が生きている間だけ使えればいいというのではなく、次の世代、世紀のために作るという意識がなければいけません。また、データベースを時間をかけて育て、そのコンテンツと利用者をつなぐスタッフが必要です。そのスタッフは、データを収集・整理する能力だけでなく、閲覧する人のニーズに合わせて質の高い情報を提供できる。つまり情報を「生かす」という重要な役割を担うことになります。ここまでできればデータは生きない。言い換えれば、ここまでできれば優秀な研究者を多数雇ったぐらいの価値を得て、しかもその価値は時とともに増すことになります。

情報のデジタル化、マルチメディアの利用、インターネットや衛星通信などの情報ネットワークは、人文学のあり方を大きく変えていく可能性をもっています。Interface Humanitiesは、世界的な情報ネットワークのノード（結節点）のひとつとして機能していくことになるでしょう。そのノードの中核にはメディアテークとでも呼ぶべき発信の場が必要になり、そこには、これま

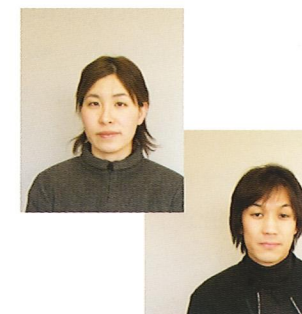
でないインターフェイス的役割、あらゆる領域間のバリアを取り払いつつ文化的生産を促進する役割が期待されることになるでしょう。

新しいスタッフ
マルチメディア教育

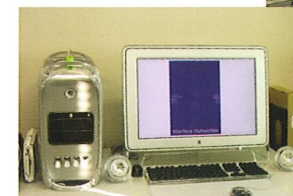
今年度から、千里にあるIMI（インターメディアウムインスティテュート）出身の清水良介、西田優子のお二人にプロジェクトに加わっていただき、メディア教育と、メディアを利用した様々な研究、教育、広報活動に協力してもらうことになりました。来年度からコンピュータを利用した研究・教育活動支援の授業を担当しますが、すでに、このニュースレターやホームページのデザイン、データベース構築準備など多くの面で活動を開始してもらっています。彼らの仕事場となるメディア・スタッフ室も機能しはじめ、まもなくメディア教育用の教室も整備されます。今後も、マルチメディア化、情報化に必要なソフト面、ハード面をさらに整えるべく準備を進めています。

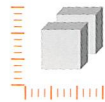
Interface Humanitiesは、マルチメディア対応型の新しい人文学、そして、開かれた人文学を創り、文字どおり大学と社会とのインターフェイスとなることを目指します。

（こうでら・つかさ／文学研究科教授
／西洋美術史）



上から順にメディアスタッフの西田優子さんと清水良介さん。





女性センターで働くということ

成定洋子

日本各地の女性センターは「男女共同参画社会」「女性の暴力撤廃」の実現に向けて、いろいろな事業に取り組んでいる。男女共同参画社会基本法・DV（ドメスティック・バイオレンス）防止法の施行にともない、新たに女性センターを設立しようという市町村がある一方で、女性センターを管理運営する財団が廃止されたり、名称が女性センターから男女共同参画センターなど変更されるケースもでてくる。これらのセンターが各地域で果たすべき役割については、それぞれ固有の文脈で語られなければならないだろう。しかしまた同時に「女性センターで働く」とことじたいの意味についても、語られなければならないのである。

私自身、二〇〇二年から沖縄県女性総合センター（（以下）「センター」）で嘱託職員として働いている。沖縄では一九八七年に、婦人団体連絡協議会などが「婦人総合センター」の早期建設を訴えた。九〇年、女性センターの建設を公約に掲げた知事が当選したことで、女性センターの実現にいきなり拍車がかかった。そして九六年、「女性に関わる諸問題の総合的・実践的調査研究、意識啓発、社会活動の促進等を行い女性の地位向上を図り、男女共同参画型社会を築いていくこと」を目的に、沖縄県女性総合センター（（以下）「センター」）が設立されたのである。県内では、那覇市の「なは女性センター」について設けられた施

設である。設立当初は、財団方式をとることで行政から独立した、女性センターの独自の運営を目指すことに重点が置かれていた。しかし、大田昌秀氏から稲嶺恵一氏へと知事が交替するとともに館長も入れ替わり、センターの運営方針じたい変更されて現在にいたっている。

（（以下）「センター」）は、財団全職員のうち四分の三を専門職である嘱託職員が占め、あとの四分の一は県庁や民間企業から出向してくる管理職である。実務に携わる嘱託職員全員が女性であることは、一見アフーマティヴ・アクションにみえるが、じつは労働条件は劣悪だ。一年契約、三年有期雇用というかたちで、賃金は低く押さえられ、残業期末等諸手当もつかない。専門職であるにもかかわらず、企画担当した事業プランの検討会議にさえ出席できない。提案した講座プランにしても、上からの指示で一方的にその内容や講師などが変更される。専門的見地から対案を出そうものなら、次年度の嘱託契約更新を拒否される。

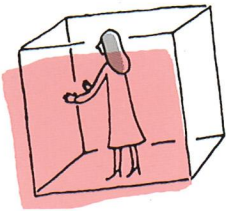
（（以下）「センター」）におけるこうした労働実態は、「女性センターにおける女性の労働搾取」であり、あきらかに間接差別といえるべき状況である。固定された低賃金は、嘱託職員を経済的に自立できない状況に追い込み、労働にたいする正当な評価を与えることができない。また、実質的な仕事を担当する女性嘱

託職員が、企画立案から事業決定にいたる過程から排除されている現状は、「男女共同参画」の理念よりも県政の意向を優先する女性センターのすがたを暴露している。こうしたなか（（以下）「センター」）で働くことは、意識的なフェミニストとして、女性の地位向上に熱意を傾けている嘱託職員自身が、労働の現場における女性への抑圧をおのずから体現することになってしまふのだ。しかし、ただでさえ失業率の高い、島社会である沖縄で、女性問題に関わるべきの仕事を見つけることは容易ではない。このねじれた状況をどう考えていくべきなのか、嘱託職員ひとりひとりにとって痛切な課題となっている。

女性センターは、もともとなかったところに、新たに創設されたものだ。その点では、既存の男性支配の組織に介入したわけではないし、男性の「特権」を侵害するものでもない。劣悪な労働条件を鑑みるならば、（（以下）「センター」）は、女性にとってアフーマティヴ・アクションでさえなかったとも言えるだろう。嘱託職員は企画運営の責任と、そのための専門的知識や経験を要求されているにもかかわらず、あくまで「嘱託」としてとどまる。したがって昇進も昇給もなく、雇用不安に慄きながら働かざるをえない。これに反して、県から出向してくる男女職員のなかには、（（以下）「センター」）に着任して初めてジェンダーや男女共同参画社会という言葉に触れるひともすくなくない。「ジェンダーフリー」の思考に賛同できずはやばやと異動を希

望したり、外郭団体である（（以下）「センター」）への異動を強いられてきてハラスメント行動を繰り返す場合さえある。適性や専門性を問わない人事政策の結果である。結局のところ（（以下）「センター」）は、抑圧される女性労働者と権力を行使する官僚とに、みごとに二極化された世界だ。そのなかで嘱託職員は、フェミニストとして自己矛盾に陥り、しかもその矛盾を構造的に作り出しているのが当の女性センターであることを自覚しつつ、働かねばならない。現在の（（以下）「センター」）が築き上げようとしているのは、フェミニズムという言葉すら「過激」でふさわしくないとして自己検閲する組織、言い換えれば、女性嘱託職員を媒介することによって男性権・官僚化していくホモソーシャルな空間にはかならない。

質の高い専門性を備えた女性センターを市民が望むのは当然だろう。「声を出せない人がいることを知っている私たちこそ、声を出していかなければならない」という友人の言葉は、この状況を安易に沖縄固有の問題に還元したり、女性問題として研究・分析対象とすることを斥ける。制度・組織のさまざまな抑圧を乗り越えながら、ここで働いているひとりひとりだけでなく、女性センターに関わる人びとが、「女性センターで働く」とこの意味について声を出していくこと。それが、男女共同参画社会の実現にむけて女性センターが果たすべき役割や機能について、さまざまな角度から論議するための回路を開くはずなのだ。



成定洋子（なりさだ・ようこ）
大阪大学大学院文学研究科博士後期課程在籍
日本学講座に所属。専門はフェミニスト人類学
沖縄県女性総合センター（（以下）「センター」）嘱託
共著『沖縄ポップカルチャー』（二〇〇六年、東京書籍）



画面にうつらない アフガニスタン

景平義文



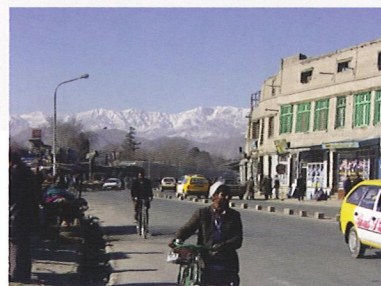
カブールに来てから一ヶ月半が過ぎた。こ
でわたしは「アフガニスタンからの遠隔教育」
プロジェクトに参加している。このプロジェクト
は、カブールと大阪大学を衛星回線で結び、
アフガニスタンの現状を日本に伝えようとい
うもので、すでに五回の講義を終了した。講義
は、あと二回を残すだけである。

わたしにとってアフガニスタン滞在は、今回
がはじめてである。日本を發つときには、カ
ブールの街はつきり廃墟と化しているものと
想像していた。ところが、そのイメージは初日
からくつがえされた。カブールは、人と車であ
ふれかえっている。廃墟になった建物も、予想
していたほど多くはない。モノはないだろうと
も想像していたが、市場では新鮮な野菜や果
物が売られ、電気屋街には電化製品がひとと
おり揃っている。人びとは、いたって普通の生
活を送っているのだ。

しかしわたしの中には、この国はどこか歪ん
でいる、という感覚がずっとつきまとっていた。
この違和感にひとつの答えを与えたのは、「国

連がいなくなればアフガニスタンは再び戦争
になるのだ」という、あるアフガン人の言葉
である。この言葉は、アフガニスタンの現実の
一面を鋭く突いているように思われる。話は
国連だけに限らないのだが、今のアフガニス
タンは治安維持を他国からの軍隊に負っており、
復興のための資金もほとんどが国外からの援
助に頼っている。雇用の創出という点でも、外
国の援助機関が大きな意味を持っている。た
しかにアフガニスタン政府は存在する。しかし
この国は、国外からの支援がなければまっ
く立ち行かず、たちどころに崩壊してしまう
危うさを持っているのだ。そう考えてまわり
を見回すと、普通に生活している人びとの風
景も、きわめて脆弱な基盤の上になっ
ていてくる。

カブールのある中学校で、生徒へのインタ
ビュー調査をしていた時のことである。インタ
ビューの最中、初老の女性教師がわたしに近
づいてきて、話しはじめた。「戦争の後、わた
しは非常に厳しい生活を迫られている。助け



カブールの中心地の風景

て欲しい。」「どのようなことをあなたにして
あげられるのか」とわたしは訊ねた。すると、

「金銭的援助をしてほしい」という。さすが
にわたしは驚いた。生徒の面前である。生徒
の模範ともならない教師が、その生徒の目
の前で、日本から来た親子ほど年齢離れた
人間に金銭を乞うのだ。生活の逼迫は、彼
女に教師としての誇りを捨てさせようとし
ている。「アフガニスタンを本当に復興さ
せようとするのなら、外国人を頼ってはい
けない」と応じながらも、わたしは何とも空
しかった。わたしの言葉は、とにかく生き抜
いていかなければならない彼女には、どう考
えても届きそうにないのだ。「アフガン人
だけがアフガニスタンを復興させることが
できる」とは、何人ものアフガン人がわたし
に語ったことである。たしかに、そのとおりに
違いない。アフガニスタンの将来を決める
のは、アフガン人自身でなければならない。
しかし、このような出来事に遭遇すると、こ
の言葉は空しいお題目となって響いてしま
う。

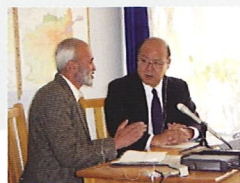
今回の遠隔教育の目的は、アフガニスタ
ンの現状を日本に伝えることである。毎
回の講義では、アフガニスタンの復興に携
わる人びと―そこにはもちろんアフガン
人も含まれる―をゲストとして招き、彼ら
自身の活動の現場からみたアフガニスタ
ンの現状を語ってもらって

いる。個別の分野から見ると、アフガニ
スタンの現状は理解しやすいように思われ
る。教員養成の分野、女性の権利に関す
る分野、母子保健の分野など、各フィ
ールドにはそれぞれに明確な問題があり、
それにたいする解決策を提示することが
できる。そうした分野ごとの状況は、遠
隔講義の受講者にはある程度まで理解
してもらえただろう。だが、アフガニ
スタンの現状は、やはりそれだけでは語
りつくせない。わたしがインタビュー調
査に訪れた中学校は、NGOの支援により
建物が修復され、一応のかたちが整えら
れていた。しかし校舎の中では、問題の
多くは解決されなままになっ
てきているのだ。アフガン人ひとりひと
りが抱える問題、そしてそこから垣間
見えるアフガニスタン社会の抱える問
題や危うさは、ゲストの話からだけでは、
なかなか見えてこない。中学校で話
しかけてきたあの女性教師のまなざし
は、この国の現実をわたしに突きつけ
てくる。その視線の重さを、どのよう
にして受けとめ、日本にいる人たちに
伝えることができるのか。カブールから
持ち帰るべき課題は大きい。

景平義文（かけひら・よしふみ）

一九七六年生まれ

大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程在籍
ボランテア人間科学研究講座に所属
国際協力論研究分野、とりわけ教育開発が研究テーマ



上：第1回遠隔教育の風景
左：廃墟と化したカブール教員養成カレッジ

浪花節の聴衆をもとめて――

「あの人の声、聴いたときはガツンときちやったよ」。

「いやあ、あんまりこたえまへんなあ」。

すこうした感想を耳にすることがある。昭和三〇年代までは、浪曲はしばしばラジオから流れてきたが、近年マスメディアにのる機会はめつかり減っている。しか

じて変容し続けてきた。ことば・身体のアクチュアリ
ティをフィールドで体感すること、さらに演者・聴
衆の関係史を探索すること、この両方のいとなみがあつ
てはじめて浪曲についての議論を、よりひろい文化の研
究として位置づけることが可能になるだろう。

共有体験を紡ぎ出す場として演芸場を位

し、その語りを味わうために演芸場に足を運ぶ根強いファンがいるのも事実だ。絞り出すように浪曲師がうなることは、頭で理解するというよりは身体で感じとられている。演目は全身体的な語りと全身体的なうけとめの交差のなかで進行し、芸を味わう体験はその場にとともに身体を置くことによつて、聴衆たちにも共有されている。聴衆ひとりひとりの味わい方はさまざまであるが、その一方で聴衆の体験が、物語そのものの文法ではなくいわば「盛り上がり」の文法」によつて、ある程度構造化されることもまた確かなのである。重要なのは、物語の意味と快楽はその内部で自己完結しているのではなく、聴衆が受けとめることにより、はじめて生み出されるということだ。ポピュラーカルチャー研究全般においてテキストの受容・利用といった局面への関心が高まっている趨勢を持ち出すまでもなく、聴衆の体験への問いかけは、演芸におけるポピュラリティーの内実を考えるさいに欠かせないと言えるだろう。また、共有体験をつくり出す演芸場の性格は時代に応じた

浪曲史を見渡すと、そこにはさまざまな画期を見いだすことができる。なかでも最近私が関心をもっているのは一九二〇年代の浪花節である。なぜなら、娯楽全般における演芸の位相がその時期に大きく変容していくと考えられるからだ。レコード、活動写真、さらにはラジオといった複製メディアが浸透していくこの時期以降に、ポピュラーな語りをうけとめる身体感覚は、ダイナミックに再編成されていくと言つていいだろう。一九二〇年代における娯楽の王様は、活動写真だった。それにたいしてこの時期の演芸の動向は、活動写真の「隆盛」と対照的に、しばしば「停滞」として論じられてきた。では、新たな視覚の快楽が台頭してくるなかでの浪花節の体験は、どのように想像しうるのか。必要なのは、一九二〇年代とそれ以前、あるいはそれ以後との間に連続的な様相を見いだしつつ、差異や亀裂を読み取っていくような作業である。浪花節をはじめとする演芸を味わう体験は前代的な特徴をどのようにひきずり、また活動写真を味わう体験

とどのような連続性・非連続性をもっていたのか。

かつて加藤秀俊が述べたように、寄席（演芸場）は近世においては地域に根づいた「近隣の芸術」であった。

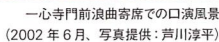
しかし、明治期以降、都市内外における交通網の拡充によって、寄席はしだいに「都市的な芸術」に変貌していく。その過程で、チヨナガレ・チヨボクレあるいはウカレ節と呼ばれた語り芸が浪花節と呼ばれていくのだが、大雑把に言つて、その口演の場は大道から仮設小

析対象にしたとしても、都市論にとどまらない論点を提起するのだ。演芸場で口演される浪花節、レコードでひろがる浪花節、さらには一九三〇年代以降全国的にラジオでひろがる浪花節、それぞれの聴衆の体験は、けっして均質ではなかっただろう。そうした体験は、総力戦下で国家機関から戦意昂揚を期待された浪花節のイメージとどのようにつながりまた差異化されていたのか。

浪花節の聴衆を追い求める作業は、読書・読者論
初期映画・活動弁士の研究、クラシックコンサート
の聴衆論やミュージックホールの研究などから受ける刺激が
交差する地点に開けていく。またその作業は、テクス
ト・パフォーマンスのポピュラリティーがどのように生成・
更新されていくのか、あるいは行きつまつていくのかと
いう、よりひろいテーマへの参入にもつながっていくであ
ろう。浪花節をはじめとした演芸が与えてくれる問い
は、まだまだ尽きそうにない。

真鍋昌賢（まなべ・まさよし）

いく過程がある。つまり浪花節を味わう体験に焦点を合わせることは、たとえ東京・大阪の演芸場を分



大阪大学21世紀COEプログラム
「インターフェイスの人文学」ニューズレター
Interface Humanities 01

発行＝「インターフェイスの人文学」研究開発委員会
編集長＝三谷研爾
編集＝永田靖 金水敏 山中浩司
ロゴデザイン＝奥村昭夫
編集協力・デザイン＝彩都メディアラボ株式会社
レイアウト＝西田優子 清水良介
印刷＝株式会社写真化学

発行日＝2003年3月10日

連絡先＝〒560-8532 豊中市待兼山町1-5
大阪大学大学院文学研究科内
「インターフェイスの人文学」事務局
Phone: 06-6850-6716
Fax: 06-6850-6718
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>
coe_office@let.osaka-u.ac.jp

Osaka University
The 21st Century COE Program Newsletter
Interface Humanities 01

Published by COE Committee Interface Humanities
Chief editor: Kenji MITANI
Editors: Yasushi NAGATA, Satoshi KINSUI, Hiroshi YAMANAKA
Logo Designer: Akio OKUMURA
Editorial advisor: Saito Media Lab Co., Ltd.
Layout: Yuko NISHIDA, Ryosuke SHIMIZU
Printed by Shashin Kagaku Co., Ltd.

Published on March 10, 2003

Contact address: Interface Humanities Office
School of Letters, Osaka University
1-5 Machikaneyama-cho, Toyonaka, Osaka 560-8532
Phone: +81-6-6850-6716
Fax: +81-6-6850-6718
<http://www.let.osaka-u.ac.jp/coe/>
coe_office@let.osaka-u.ac.jp

